

地域の日本語教室と連携した行政・専門機関による初期日本語教育(素案)

論点	コンセプト	イメージ	学習者・学習内容	指導者等
<p>内容</p>	<p>ボランティアの日本語教室がある中、なぜ初期日本語教育を考える必要があるのか</p> <p>ある程度日本語ができるようになれば、日本人と普通に話したり、生活の中で日本語を勉強することができる。しかし、最初の取りかかりである初期日本語教育は専門家でないとなかなか難しい。</p> <p>なぜ初期日本語教育に地域で取り組むのか</p> <p>多文化共生社会をつくっていくには、地域で外国人をしっかり受け入れる体制が必要である。そのために、地域の日本語教育をしっかりやらないといけない。その認識をもう一歩進めようと思った時、初期日本語教育が大事である。</p>	<p>集中的に初期日本語教育を行い、地域につなげることを目的とした教室</p> <ul style="list-style-type: none"> ☞地域の日本語教室とシンクロさせ、その教室の人たちにも関わってもらう <p>【当面の構想】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成 30 年度から、市町村国際交流協会の日本語教室と連携して 2 か所で実施（平成 30 年度後半・平成 31 年度前半で 1 セット） ・平成 30 年度～32 年度にかけ、文化庁プログラム A を活用して実施し、32 年度にその成果として、「愛知県における初期日本語教育」の定義や学習内容を対外的にアピールする ・モデル的に実施した市町村において継続できるように支援するとともに、各地で開催できるように、財源を確保して継続していく 	<p>【学習者】</p> <p>生活者としての外国人</p> <ul style="list-style-type: none"> ☞ゼロ初級レベル ☞就職や日本語能力試験を目的としていない <p>【学習内容】</p> <p>「生活するために必要な日本語」を勉強するための取りかかりとなる日本語</p> <ul style="list-style-type: none"> ☞目標 ・日常生活の簡単な表現を理解でき話す事ができる ・地域の人と関係がつくれる程度の簡単な会話ができる ・文字は、ひらがなが読める程度 <p>【レベル】</p> <ul style="list-style-type: none"> ☞地域の日本語教室での学習を含め N 5 程度を目指す 	<p>【地域における日本語教育の専門家】</p> <ul style="list-style-type: none"> ☞地域の多文化共生を支える外国人の人材をつくるための日本語教育が行える専門家 ・日本語教育の専門家に地域の専門性を身につけてもらうイメージ ・シラバスを一緒につくる中で地域のことについても理解してもらう <p><専門性の整理></p> <ul style="list-style-type: none"> ☞日本語教育の専門性 ・学習者のレベルを把握し次につなげることができる ・日本語のわからない人に日本語を使って日本語を教えられる ・日本語の専門的な知識と教育方法の知識がある ☞地域の専門性 ・地域や住んでいる外国人の状況に関する知識 ・日常生活を営む上で必要となる日本語とは何かを知っており、かつ、その内容を理解している ・地域の日本語教室のことを理解している <p>【ボランティア】</p> <ul style="list-style-type: none"> ☞地域の日本語教室で活動しているボランティア ☞3つの役割 ・会話練習の相手役等 ・地域の状況に関して専門家を補助する ・地域の日本語教室とつなげる ☞養成講座で日本語がほとんどできない学習者への指導方法等を教える

